

読解に困難を示す児童・生徒への理解と支援

～通常学級における英語指導を中心に～

○小野村哲 北村直子 盛 弓子 平井理心 (NPO 法人リヴォルヴ学校教育研究所)

I 目 的

代表発表者は公立中学校で 16 年間英語の指導にあたった後、2000 年に NPO 法人を設立。1997 年に東京 YMCA 英語専門学校で開始された英語学習に困難を抱える生徒への支援プログラムに関わって以来、不登校児童生徒の支援とともに、英語を中心に特定の分野の学習に困難を示す児童生徒の学習支援に取り組んでいる。ここではその実践を踏まえ、特に「理解のための読み(reading for comprehension)」に焦点を当て、具体的な支援策を提案したい。

そもそも「読む」ということは、単に文字を音声化(音韻的再符号化: phonological recording)することではなく、単語や文法、文脈、さらには生活や文化に関する背景的知識までを総動員して行われる創造的な活動である。そこでは、文字を再符号化し文法に則って読み解くといった継次的な処理と、全体を推論し理解する同時的な処理とがバランスよく行われることが必要となる。

ところが今、英語教育に限らず多くの学校で行われている「読むこと」の指導は、継次的方略の指導に偏重している。OECD が 2003 年に実施した国際的な学習到達度調査でも日本人中

学生の読解力低下が報告されたが、この偏りはその一因としてあげられるのではないだろうか。言い換えれば、この偏りは読むことに関する児童生徒の困難を助長してしまっていると考える。したがって私たちは、バランスを崩す要因となった不得意の克服を試みながらも、つねに「バランス」の一語を念頭に置き支援に当たってきた。以下にその概略を順を追って報告する。

Ⅱ 読みの困難とその支援方法

1 文字が読めない

読めないということの中には、まず「文字を認知、識別できない」という困難がある。これには第 13 回、14 回 LD 学会で発表したひらがな指導に関する手法と同様の方法で支援を行っている。

【表 1】

(1) プロトタイプの形成困難

- ① 文字の特徴をとらえられない児童生徒のために、文字形を言葉で説明できるようにした。【表 1】
- ② 鏡文字を防ぐために、イラストの中に文字を入れ込み、方向性や文字形を印象づけられるようにした。【図 1】

a	くるっとまわってたて棒、1 階建て
b	2 階からたて棒、くるっ
d	くるっとまわって、2 階からたて棒
g	くるっとまわって、地下室に釣り針

大文字は習得できても小文字は難しいという児童生徒には、大文字とそっくりな文字と似ている文字、違っている文字とにグループ分けをして練習。特に似ている文字については、イラストを利用して共通点を児童生徒自身に気づかせるようにした。【図 2】

(2) 文字音声化の困難

アルファベットの音声化に困難を示す児童生徒に対してはフォニックスの指導が有効であることは、すでに長年の実践が証明している。使用言語の特徴から、日本人児童生徒はいわゆる「音の足し算・引き算（音韻操作）」を苦手としがちである。sit から s をとれば it になり、そこにまた h を加えれば hit になる。これを習得すれば badminton や September のような語はさらに 3 (bad)+ 3(min)+3(ton)の足し算で、より容易に読んだり書いたりできるようになる。

・第一段階：子音字の文字音指導

P /pi:/ says / p / / p / panda. とリズムにのせて練習をするとともに、牧野他(2001)でも報告された学習ソフト「Lexia」(<http://www.lexialearning.com/>)を利用しその支援にあたっている。

・第二段階：単母音字の文字音(短母音)指導 音素弁別に困難を示す児童生徒に初めか



【図 1】

大文字と小文字

どこかにていいる文字のなかま

大文字と小文字で、どこかにていいるかをたしかめながら練習しましょう。

A a c a

クルシとまわって たてぼう エイ

なまえ：エイ
お と：エイ／エア

ant エアント
一筆書きにしてもかまいません。

B b l b

2 階から たてぼう クルッで ビー

なまえ：ビー
お と：ブ

bat ball
大文字のBから、上のクルッをとった形。dとは書き順でも区別しましょう。

ベアット
ボーウ

【図 2】

ら音の正確さを求めると、かえってそれが高いハードルとなり学習を阻害してしまう。とりあえず英語の「あいうえお」は「a→ェア、i→イ、u→ア、e→エ、o→オア」と日本語との対比からスタートしている。

この段階から始まる「音の足し算・引き算（音韻操作）」の練習は、独自に開発した「ABC 英語れんしゅうちょう」を用いて行っている。【図 3】

・第三段階：単母音字の文字音(長母音)指導

第一段階については英語学習の開始段階から、第二段階も 4～10 時間目程度から指導を開始するが、長母音についてはサイレント e のルールとともに、第二段階までの習熟状況をみて指導を開始している。通常の中学 1 年生のクラスでは、語いがある程度に達する夏休み明けが目安と考える。

英語の a i u e o には、「名前読み(長母音)」と u を除いて「ローマ字に近い読み方(短母音)」があることをまず確認し、【表 2】

+ a (エア)

f	+ an	= fan	•	•	
v	+ an	= van	•	•	
p	+ an	= pan	•	•	
n	+ ap	= nap	•	•	
c	+ ap	= cap	•	•	

【図 3】

p	+ ea	= pea	•	•	
p	+ each	= peach	•	•	
b	+ each	= beach	•	•	
t	+ each	= teach	•	•	

a	{	エア	i	{	イ
		エイ			アイ
u	{	ア	e	{	エ
		ユー (ウー)			イー
o	{	オア			
		オウ			

【表 2】

【表 2】

のような対比から規則性を児童生徒自らに気づかせるようにする。その上でやはり「Lexia」を利用し支援にあたっている。

- 二重文字（ダイグラフ）その他の指導

sh、th や ea などの二重文字や ou や ow 等のブレン드의指導は、適宜該当する文字が教材中に出てきたときに取り上げている。

- ローマ字の指導

山田（1989）らは、ローマ字知識が入門期英語学力の有力決定要因であることを指摘している。しかし現在、小学校でローマ字指導に充てられる時間はごくわずかである。そこで特に第一・第二段階でつまずきを見せる児童生徒には、遑ってローマ字の練習に取り組ませている。

これにはタイピングソフト（ローマ字入力）を利用。その上で、慣れ親しんだ日本語で「音の足し算（引き算）：kame（カメ）→ame（アメ）→mame（マメ）」を行うことで、英語の音韻操作への困難を軽減することができた。

2 音読がスムーズにできない：フォニックス指導のマイナス面

ここまではフォニックスの利点について述べてきた。しかしこればかり頼れば、一文字一文字を再符号化しさらにこれをつなぎ合わせて単語として認識していくという過程に時間を要し、読みはたどたどしいものにならざるを得ない。フォニックス指導は、つまずきを軽減、回避する有効な手段になりえると同時に、用い方によってはかえってマイナスになる可能性も含むものである。

事例として、「霞ヶ浦は日本で二番目に大きな潮です」という文章を読ませてもその間違いに気がつくことができずに「潮」を「湖」と読んでいた A 男にフォニックスを指導したところ、病院を話題にした短文で‘hospital’の再符号化にその度ごとに困難を示すようになり、「何の話だった?」「病院」「病院は英語で?」「ホスピタル。ああ、そうか。hospital か」というやりとりを何度も繰り返すこととなった。もともと彼は文字の再符号化に困難があり読解の正確さには乏しかった。しかしフォニックス指導の結果、内容理解のための読みの速度は比較的速かったものが人一倍遅くなり、内容理解の正確さもかえって低下してしまったのである。

フォニックスによる読解は典型的な継次処理である。継次処理が優位な生徒でも英語のつづりの規則性には気がつかずにいることが多く、そのような生徒にフォニックスを指導すると驚くほどの伸びを見せることがある反面で、文脈を考えずに、

Helen picked a nice tie for me. 「ヘレンは私に、素敵なネクタイを選んでくれた。」

の pick を「摘んだ」などとし、「英語は1つの単語がいろんな意味をもっているからわからない。むずかしい」と英語嫌いを助長してしまうこともある。逆に同時処理優位な生徒にフォニックスを指導したところ、これもやはり大きな伸びを見せる生徒がいる一方で、先ほどの A 男のようにその長所が失われ「よけいに難しくなった。わからなくなった」と言われてしまうこともあった。

先述したように、つまずきやすい子ども達に共通して見られるのは、バランスの悪さである。フォニックス指導にあたっても、留意すべきはいかにしてバランスを整えるかということであり、フォニックス指導自体が目的となればよい結果を期待することは難しくなる。

(1) 単語が読めない

フォニックスには例外も多い。例えば代表的なルールの一つとしてあげられる「サイレント e」にしてもその適用率は 63%に過ぎない。(Clymer,T. 1963) さらに以下のような英文では penguin を「ペンガイン」としてしまうこ

Penguins are birds but they cannot fly.

ともありえる。このときフォニックスの知識は、かえって理解を阻害してしまっていると言っている。ui を guitar などの例から /I/ と覚えさせてしまうことも考えられるが、こうしてルールを教え込み始めれば、それこそ泥沼にはまり込むことになる。

そこで独自に開発した「ABC 英語れんしゅうちょう」では「音の足し算・引き算」と並行して、「身近な単語」と題した練習を取り入れた。【図 4】

一見似たような練習であるが、この 2 つの練習の目的は大きく異なっている。前者は継次的処理能力の伸長を目指したものであるのに対して、後者「身近な単語」の練習はまず絵から入り線で結ばれた先に記されている単

【図 4】

D d

なまえ：ディー
お と：ドゥ

↑と同じように、べるの先を上の前ぐきのうらにつけて、「ドゥ・ドゥ」と発音してみよう。

	d + ance	= dance
	d + uck	= duck
	d + og	= dog
	d + ish	= dish
	d + esk	= desk

G g

なまえ：ジー
お と：グ/ヂ

a, u, oの前では「グ」ですが、i, eの前では「ヂ」と読むこともあります。

	g + as	= gas
	g + um	= gum
	g + od	= god
	g + ift	= gift
	g + et	= get

語を推論する。例えば鶏の丸焼きの絵を見て、「チキン？いや、ディ……、ディッシュ。ああ、メイン・ディッシュのディッシュか」と生徒自らになぞなぞを解くような要領で単語を読ませるようにした。またここでは、カタカナ語として馴染みのある語を用いている。

フォニックスの知識を生かしながらも、まず文字情報以外の情報、知識を生かして単語を読むこの練習を繰り返したところ、先述したような同じ単語の音声化で繰り返すつまずいたり、読みのスピードが遅くなるといったフォニックス指導の問題点を解決することができた。

(2) 英語のリズムがつかめない

必要以上に発音の正確さを求めれば、それ自体が英語学習の妨げともなる。しかしまとまった文章の音読練習は、語を1つのまとまり(chunk)として理解できるようにする上でも重要な意味を持つ。言い換えれば、アクセントやピッチ、イントネーション、リズムに対する気づき(awareness)に乏しい生徒は、内容理解にも齟齬を来たすことになりやすい。

そこで英語のリズムがつかめない生徒のために、ただ聞かせるだけでなく、オーケストラの指揮者のように手振りでそのリズムを示すなど工夫し、成果を収めることができた。弱く発音する部分では手で素早く小さく円を描き、強く発音する部分ではゆっくりと大きく円を描く。【図5】音の高低は手を上下させて示す。それでもリズムに乗れない生徒には肩に手を乗せ、弱い部分では人差し指で、強い部分では4本の指で軽く肩を叩くようにする。生徒自身に手を大きく上下させるなども有効であった。

I wash my face.



【図5】

3 内容が理解できない

音韻的再符号化に困難があれば、それ自体に注意が集中し、内容理解は難しくなる。それは

私たちが洋画を見るときに、母語であればちょうどいいボリュームが、外国語では音量が少ないと感じてしまうのに似た状態にあると推測される。そこでこれまでは、再符号化への抵抗を軽減しながらも、音または文字そのものによってもたらされる情報を意味のあるものとして理解するために、他の情報や既得の知識と統合的に捉えるための練習方法を提案してきた。

ここからは、ある程度音読ができて内容の理解に困難がある生徒への指導方法を提案してみたい。

(1) 方略的能力のアンバランス

Carrell(1989)は、優れた読み手は局所的ストラテジー（継次的処理）に頼りすぎることなく、全体的ストラテジー（同時的処理）と両方のストラテジーをバランスよく活用し、読みを苦手とするグループでは局所的ストラテジーに頼って問題を解決しようとする傾向があると報告している。考えてみればこれは、日常生活の中で何事かあったときに私たちは視野を狭めてしまいがちであることと共通している。

すでに引用した次の英文でも、読みを苦手とする生徒は **penguin** を理解できなければそこで立ち止まってしまう傾向がある。

Penguins are birds, but they cannot fly. They can swim well.

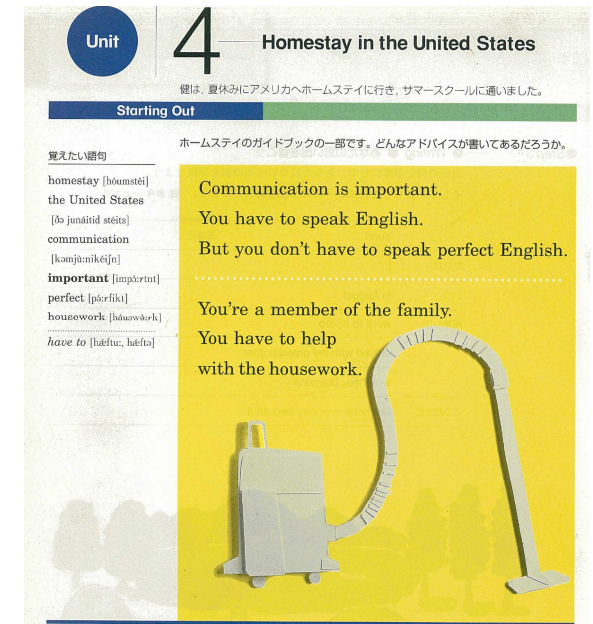
これを先に読み進めれば、「birds : 鳥、cannot fly : 飛べない、swim : 泳ぐなど」の情報から、それがペンギンであることが推論できそうなのであるが、先を読まず、読んだとしても意識は **penguin** にばかり集中し、「わからない」ということになる。事実、読解が苦手だという生徒をよく観察していると、ここでいう **penguin** のような語に行き当たったときに、姿勢が前かがみになり視点もその一点に集中してしまいがちであることがわかる。

そのようなときには、「背筋を伸ばして、テキストを少し離して見てごらん」と指導をしている。するとそこにはペンギンのイラストが添えられていたりするが、それに気がつかないでいる生徒も少なくない。

そこで教科書の本文を読むときには、何について書かれた英文かを、添え文（日本文）やイラストから推論し、話し合うことから始めるようにした。例えば、中学生用教科書 **NEW HORIZON Bk.2 Unit.4 Homestay in the United States** では、「健はホームステイに行き、サマースクールに通いました。」「ホームステイのガイドブックの一部です。どんなアドバイスが書いてあるだろうか」との添え文があり、お手伝いをする少年のイラストが添えられている。それを確認した上で、「ポイントは2つ。まずはどんなことが書いてあると思いますか。せっかくアメリカに勉強に行くんだから……？」と問いかける。その上で英文を読ませると生徒は、**You have to speak English.**を「英語を話しましょう」と訳す。文法に着目するならば、ここは「英語を話さなければいけません」としたいところだが、コミュニケーション上は「話しましょう」のほうが、より自然である。次に **But** で一度ストップし、「だけど……？ 続きは何て書いてあると思う」とまた問いかける。すると生徒の多くは、未習語の **perfect** をフォニックスやカタカナ語の知識を活用し、「完璧」と理解することができた。【図6】

同様の手法で、一部の中学3年生にはセンター試験の長文問題(2003年度本試験)にも取り組ませた。まずは「**Stress Relief Methods**」というグラフタイトルからストレスに関する英

【図6】



文であろうことを確認。次に sleeping、sports、nurse、teacher などの語から、タイトルを「ストレス解消方法」と読み解かせた。続いて x、y、z それぞれには何が入りそうか予想させた上で、とりあえずわからない単語は無視して、理解可能な文字情報を整理するように指導した。すると全員が正解を導き出すことができ自信を得るきっかけとすることができた。【図 7】

第 4 問 次の文章とグラフを読み、下の問い(A・B)に答えよ。(配点 35)

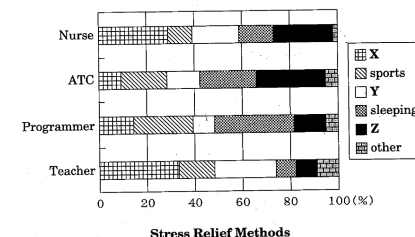
It is well known that stress affects workers' health. When workers are not well, they tend to miss many days of work every year. The organizations they work for are, in turn, not as productive as they should be. However, levels of stress in different occupations, and the ways that workers relieve such stress, have not been studied in depth. The Occupational Psychology Association (OPA), therefore, conducted a survey on the effects of stress on workers in four different occupations and on the methods they use to relieve workplace stress.

The OPA researchers interviewed 100 workers in each of four occupations: nurses, air traffic controllers (ATCs), computer programmers, and junior high school teachers. The workers were asked about the kinds of stress symptoms they had and how they dealt with stressful situations.

The pressure of the job was the most common stress symptom found in all four occupations. The figure below shows how people in the four occupations relieved stress.

A グラフの X、Y、Z に対応するストレス解消法の組合せが、その順に示されている。最も適当な配列のものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。 33

- ① music — shopping — talking
- ② music — talking — shopping
- ③ shopping — music — talking
- ④ shopping — talking — music
- ⑤ talking — music — shopping
- ⑥ talking — shopping — music



The nurses interviewed claimed that talking to others and shopping were the usual ways to relieve stress. They also said that they liked listening to music from time to time. The ATCs claimed that the responsibility for hundreds of lives on the job put a lot of pressure on them. They relieved this stress by shopping or sleeping, and when possible by playing sports. The computer programmers, on the other hand, preferred sleeping and playing sports as the best ways to escape the effects of any stress. They said that shopping, talking to others, and listening to music were less frequently used methods of stress relief for them. The teachers preferred talking with other teachers as well as listening to music, particularly classical music, as the best ways to relieve stress.

The OPA researchers concluded that workers in different jobs have different types of stress symptoms and employ different ways of relieving stress.

【図 7】

(2) 構文が理解できない

単語は理解できても構文を理解していない生徒は、次のような英文を「兄はオーストラリアで撮った写真をリサに送った」などとしてしまう。

My brother sent me the pictures that Lisa took in Australia.

このような生徒には、英語検定試験の並べ替え問題やパソコンソフト「英語漬け」を用いてその支援に当たっている。

例えば以下のような問題であれば、まず「英語は基本的に主語+動詞」を確認した上で、「どの単語とどの単語がくっつきそうですか」と問う。必要があれば図 8 のように図式化し、□の中に適語を埋めさせる。まず考えられるのは「オーストラリアで」から in Australia であ

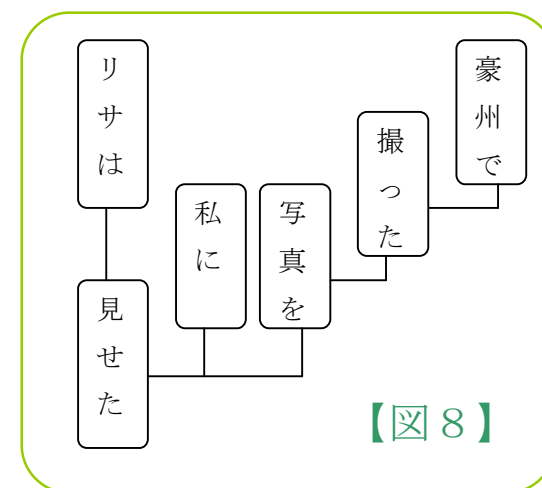
る。続いて「showed につく言葉は」と言いながら、いくつかの語を「意味ある単位 (meaningful unit)」として捉えられるように支援する。

リサはオーストラリアで撮った写真を私に見せてくれました。

Lisa showed Australia.

① in ② she ③ took ④ me ⑤ that ⑥ the pictures

また、「英語漬け」を用いるとほとんど例外なく生徒は、耳だけで英文を聞き取ってタイピングしようとする。しかしそれはなかなか難しい。そこでまず、「耳ではなく、文法で聞き取ろう」と助言する。並べ替え問題と同じ要領で、主語を確認し、その次に来る語は何かを意味のつながりから推論させる。この練習は聞き取りの練習もかねて、構文や意味のまとまりを意識させる上で非常に効果的である。



Ⅲ まとめ

読解に困難を示す児童生徒の支援にあたって配慮すべきは、まずアセスメントをしっかり行ったうえで、2つの認知処理様式に応じた指導法のバランスをとることである。また昨今では、伝統的なアプローチへの批判から「読むこと」を軽視する向きもあるが、ナチュラル・アプローチを提唱したクラッシュェンさえも「読むことは重要な役割を持ちうる」としている。もちろんここで提案した支援方法は、当然日本語の読解指導においても有効である。

今後は、stop / spot / post のような語を頻繁に読み間違える児童生徒への支援のあり方について研究を重ねたいと考えている。